大名行列というのは、徳川幕府が諸国の大名を統制するために、一定期間大名を江戸へ参府させ、火の番や火消し、警固にあたらせた制度で江戸と領国との往き来を、家柄や石高によった規模で行列したことをいいます。都留の大名行列は、十万石の格式と称されていますが、その規模は馬上十騎、足軽八十人、中間・人足が百四十人から百五十人、総勢二百三十人から二百四十人だといわれています。下天神町の行列は、総勢九十九人で十万石には及びませんが、この小さな町で出せる精いっぱいの人数で編成したもので、小規模は承知で十万石の格式と称し続けてきたものでしょう。現在は百十二名での行列となっています。

また、仮装行列、花車、踊りなど趣向を凝らした「にわか」ものをだして、祭りの景気を競い合い、八朔祭りを盛り上げたことも伝えられています。

大名行列の復活

この大名行列は、昭和四十三年を最後に交通事情や人手不足などを理由に中止となり、その後四十九年に一回実施されたまま見送られてきました。

昭和五十七年、県内外でも珍しいこの大名行列を復活させようとする気運が高まり、実行委員会を組織してこの年の八朔祭で見事な復活を遂げました。また、六十二年には、交流の深かった東京都板橋区の区民祭りに招待され、その勇姿を初めて県外で披露し、大きな成果を上げました。

その後は、毎年「おはっさく」に、大名行列が見られるようになり、祭りの人気イベントとして、たくさんの観光客を集め、みなさんの目を楽しませています。

昭和33年ごろは、趣向を凝らした「にわか」と呼ばれる芸も行われていました。

昭和62年、板橋区の区民祭りに招待され大名行列を披露。

屋台と飾り幕

大名行列の後に続くのは、豪華な飾幕を付けた屋台です。その舞台で、芸者衆や若者がお囃子に合わせて様々な出し物を演じ、豊年を神に祈念しました。

このころ、その美しさや派手さを競い合って屋台を曳いたのは、早馬町、新町、仲町、下町の四町でしたが、交通事情などにより屋台を曳く姿は見られなくなりました。その後、昭和四十八年に貴重な文化財である飾り幕を補修、復元するため都留市で保存会を発足させ、四枚の後幕が完成しました。

仲町所有の「桜に駒」、新町所有の「鹿島踊」、下町所有の「虎」、早馬町所有の「牧童牛背に笛を吹く」がその四枚で、下絵は、「虎」が絵師葛飾北斎、「桜に駒」が「鳥文斉藤原栄之」、の作品であることから、いかに貴重な文化財であるかがわかります。

現在は、仲町を除く三町の屋台が復元され、今年の九月一日の「八朔祭」では見事に飾られた屋台を目の当たりにすることができました。

昭和11年の八朔祭で下町屋台が繰り出した時に、記念撮影したもの。